

第 31 回(2010. 1. 23 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「辰は龍」

「辰」は、古代中国では「振(ふるう)」で、「ととのう」という意味があり、植物の芽が出て地上を覆い、やがて草や木の状態に形が整う様子を表す言葉だったという。これを龍に当てはめたもので、十二支で、唯一想像上の動物である。

古代中国において、殷の時代の青銅器には蛇の頭や牛とか羊の角、鳥の嘴あるいは虎の爪など、いろいろな動物の一部分を併せ持った得体の知れない模様が描かれている。これが後世になって龍と呼ばれるようになったという。殷の時代は紀元前 17 世紀～紀元前 11 世紀ごろだといわれている。日本では縄文時代の後期である。そのころ、殷ではすでに青銅器が使われていたらしい。青銅器が日本に伝わったのは弥生時代(紀元前 10 世紀～前 5 世紀ごろから 3 世紀ごろまで)である。ちなみに、ヨーロッパでは、先史時代区分の一つに、石器時代、青銅器時代、鉄器時代がある。日本では、縄文式土器が現れる今からおよそ 1 万数千年前までを旧石器時代と呼んでいる。また、弥生時代に青銅器と鉄器とが同時に出現するから、ヨーロッパのように石器時代、青銅器時代、鉄器時代という時代区分は出来ない。そこで、石器と土器などによる時代区分がなされて、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代に区分されてきた。

江戸時代前期に、医学者寺島良安が書いた「和漢三才図会」という辞書には、龍の頭はラクダ、首はヘビ、腹はハマグリ、鱗はコイ、爪はタカ、掌はトラに似ているという中国の文献を載せているが、それによると、龍には、角がある龍、角がない龍、あるいは翼のある龍などいろいろな龍があるようだ。また、仏教にも龍が取り入れられて、仏法の守護神として八大龍王がいる。龍は、いつも水辺にいて雨を降らせる神として、頭にコブラをつけた守護神像が描かれているが、そもそも古代インドには龍族(ナーガ族)が住んでいる国が地底にあって、都には龍王であるアナンダ王が、きらびやかな龍宮で美女に囲まれていると信じられていた。日本にも、龍は水中に住み、降雨を司る龍神として全国に祀られている。たとえば、丑の刻参りなどで有名な京都の貴船神社は、水の神様で、御神体は甕(おかみ)である。甕という字は、雨の下に口が三つ並び、その下に龍の文字が来る。やはり竜神に関係しているのであろう。丑の刻参りについては第 19 回「7 月は土用丑の日」で詳しく触れたので読み返すといい。そして、今夜うなされるがいい。

龍になる人たち

西暦 712 年に成立した『古事記』によれば、日本列島を生んだイザナキノミコト(伊耶那岐命)とイザナミノミコト(伊耶那美命)は、次々と自然界に必要な神々を生みだしたが、火の神を生んだ時に、イザナミは炎に焼かれて死んでしまい、怒ったイザナキは、生まれた火の神の首をはねてしまった。その剣から滴る血で、剣神や雷神などが生まれたというが、剣を握った指の間から滴る血から生まれたのが、クラオカミノカミ(閻淤加美神)とクラミツホノカミ(閻御津羽神)で、この二神が「龍神」だとされている。また、ホオリノミコト(火遠理命=山幸彦)と、兄であるホテリノミコト(火照理命=海幸彦)の神話があるが、兄から借りた釣り針をなくした山幸彦が、釣り針を探しに海底の宮殿に着き海神オオワタツミノカミ(大綿津見神)の娘ヨタマヒメノミコト(豊玉毘売命)と結婚する話は、龍宮、龍神として童話にもなっている。ちなみに、この山幸彦の子供がウガヤフキアエズノミコト(鵜葺草葺不合命)で、タマヨリヒメノミコト(玉依毘売命)と結婚して生まれたカムヤマトイワレヒコノミコト(神倭伊波礼毘古命)が、大和を平定して神武天皇になるのである。

海千山千という言葉がある。煮ても焼いても食えないしたたかな人のことをいうが、蛇が海に千年、山に千年住むと龍になるということから来た言葉である。国会でも、のらりくらりと答弁している

したたかな議員さんたちは、きっともうじき龍になるにちがいない。そういえば、故人になってしまったが、龍太郎などと名乗っている総理大臣もいたっけ。

乙な女性

西暦 720 年に成立した『日本書紀』には、丹波の国の浦島子が、海の彼方の仙人が住む理想郷の蓬莱山(ほうらいさん)に行ったという記録がある。これらの話から、有名な浦島太郎伝説が生まれたのだろうといわれている。この浦島伝説は、多くの童話と同じように日本各地に似たような話が存在するが、この伝説には龍宮城とあるだけで、登場する住人は乙姫さまだけで龍王や龍神が出てこない。どうして乙姫なのか、甲姫では不都合でもあるのだろうか。物知りの友人に聞いたら、「うるせえ奴だなあ、オツな女だから乙姫なんだ！」と訳の分からないことをいった。「あの伝説はなあ、宇宙人がやって来てだなあ、亀は亀の形をした宇宙船で、龍宮城は空飛ぶ円盤だったんだ」などと話が脱線していく。しかたがないから『広辞苑』をひくと、乙(おと)という字には、甲の次だから下、あるいは末っ子ということに通じる。そこで、接頭語として「愛らしい」とか「美しい」とかいう意味があるのだという。親にとっては末っ子ほどかわいいものだというが、8 人兄弟の末っ子である雲竹斎にはその実感がない。まあ 8 人もいれば親もかわいがっている暇もないか。乙姫とはその意味からきたのかもしれない。そこで、自分は決して良いと思っていない女性に対して、諸君の友人が「あの娘は乙姫人だ」といったとしても、愛らしいとか美しいというのは主観的なものだから、100 人中 99 人が認めなくても自分が良いといえば乙姫は誰だって良いのであって、その友人の美的感覚が狂っているわけではない。ことわざに「蓼食う虫も好き不喜欢」というではないか。ちなみに、このことわざは、蓼という木の葉は非常に苦いのだが、それを好んで食する虫がいるという意味からきた言葉である。つまり、「十人十色」あるいは「亭主の好きな赤烏帽子」ということわざと同じ類である。烏帽子(えぼし)とは、聖徳太子の「冠位十二階」で定められて以来江戸時代まで続いた男性が頭にかぶる、通常は黒色の帽子のことである。変わった色の赤烏帽子でも好きならそれでいいではないかという意味である。

ところで、美しいとかオツな女性といえ、江戸時代の「辰巳芸者」があげられる。辰巳芸者は深川芸者のことだが、当時の深川は江戸城の辰巳の方角(南東)に位置していたから、深川芸者を辰巳芸者と呼んだのである。深川は、諸国から運ばれてくる物資の集散地だったため、江戸で最も大きい幕府非公認の遊里街(岡場所)があったから、多くの人々が集まり、料亭、芸者も非常に多かったという。当時の豪商だった紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門なども、商売柄この深川で派手に遊んだといわれている。この辰巳芸者は、吉原芸者の「派手」に対して、「粹」を売りにして、もともと男が着る羽織を身につけたことから、「羽織芸者」とも呼ばれていた。そもそも、芸者とは芸達者からきた言葉だという説がある。芸者は、武芸者にも通じるから、本来は三味線や踊りだけでなく教養も高い人を「芸者」というのであって、バーやキャバレーのアルバイト・ホステスのようなものではない。男性にとって芸者遊びは男の甲斐性だ、などといって芸者を相手に飲んだり騒いだりしたいものだが、芸者遊びは非常にお金がかかる。だから、温泉旅行のついでに安い芸者を揚げて遊ぼうとするのだが、場合によっては、芸事などはまったくに期待はずれで、場末のバーでホステス相手に酒を飲むのと何ら変わらないことになってしまいかねない。本当の芸者遊びは、芸者を遊ばせ、自分も遊ばれるような深い教養と見識が必要だ。これは以前訪れた向島の置屋のおねえさんがいっていた言葉である。雲竹斎はお金も教養もないから、ただで遊んでくれる人なら芸者さんでなくてもいい。若くて美人で優しければ文句はいわない。どうも話が横道にそれたようだ。なんの話だったっけ？ そうそう、龍の話だった。まあ、龍などはしよせん架空の動物の話だ。真剣に考え込まなくてもいい。